

はじめに

陳寿の「三国志東夷伝序文」に、

- ・班固の漢書は、張騫の報告によって、はるか西方の「果て」への認識を記した。
- ・これ対して三国志は、史記・漢書の及ばなかったところ、「東の果て」の地を記録した。それは倭人の女王国の使者の導きによって、さらに東南四千里の地、「侏儒国の長老」から、東南船行一年の地の存在を聞き、これを報告したのであった。

(古田武彦『俾弥呼』ミネルヴァ書房、170～3頁要約)

と記されていることから、古田武彦氏は“倭人伝の主要な目的は「女王国」だけでなく、当時まだ中国側の「未知の認識」にとどまっていた日出る所に近い地「裸国・黒齒国」に対する「見聞」を確かに記述したこともあった”と述べられています(注①)。

倭人伝の目的の一つ「裸国・黒齒国」がどこにあったのか、ほとんどの学者はまったく触れていません。古田氏がどのような方法で南米エクアドルにその地を見つけ、またそこが倭人の地であったことを証明するどのような考古史料が出土しているのか、2007年の古田氏一行の現地調査、また最近の情報を交え報告します。

(一) 古代史学のコペルニクスの転回

古田氏の学問は“「同時代史料」(中国史書など)と「考古出土物」を重視する手法”で、従来の古代史学会の“後世史料である『日本書紀』という答えから「中国史書・考古出土物」を解釈する研究方法”とは180度真逆の「方法」です。中小路駿逸氏は“古田説は「多元史観」などが注目されているが一番大事なのは「根拠が先で答えが後」という学問の手順である”とし、従來說との違いを次のようにまとめられています(注②)

	学問の手順	二説が対立した時
古田説	根拠が先で答えがあと	それ自体の根拠を示すことができる
従來說	答えが先で根拠があと	それ自体の本来の根拠を示すことが出来ない

古田氏はこの“古代史学のコペルニクスの転回”により、「女王国、裸国・黒齒国」の問題を解明し、さらには1300年間隠蔽されてきた「日本古代史の真実」を明らかにされました。その方法とはどのようなものか、具体的に述べていきたいと思えます。

(二) 『「邪馬台国」はなかった』“立論の基礎”

「女王国」は九州にあったのか大和にあったのか、江戸時代以来すべての学者は、原文にある「邪馬壹国」を“ヤマト”という答えに導くために何の疑いもなく「壹」を“ト”と読める「臺・台」に改訂していました。古田氏は『「邪馬台国」はなかった』において、『三国志』全文から「壹」と「臺」の字の全数調査を行い「壹」と「臺」を峻別、その内容を検証することにより、従來說の主張する「邪馬台国」はまったく“根拠がなく改訂された”もので、女王国の名は“邪馬壹国”であることを証明しました。そしてこれを“立論の基礎”とし(注③)、次に「倭人伝」に記された行路を確かな根拠を示しながら着実に

論証を進め、博多湾岸にたどり着きます。そこは「三種の神器」が埋納されているまさに「王家の谷」といえる所で、魏から送られた中国絹なども出土していました。俾弥呼の住む「女王国」は博多湾岸にあったのです。この段階で学問的に「邪馬台国」論争に決着がついたといえます（注④）。そして氏はさらに論を進め、「裸国・黒齒国」は南米大陸の北西沿岸にあったという仮説にたどり着きます。その道程と根拠を追ってみたいと思います。

(三)「倭人伝」里程（短里）の確定

倭人伝解釈において問題となっている里程について、従来説は“中国史書は信頼性がない”との立場から無視しますが、古田氏は判明している下図の①～⑤までの実際の距離から、倭人伝に使われている里程は

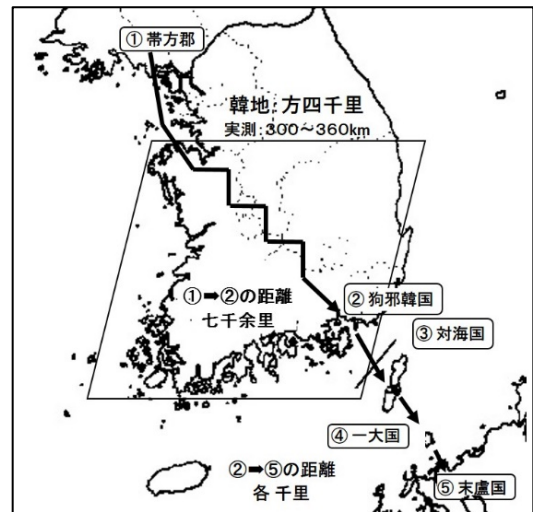
$$1 \text{ 里} = 75 \sim 90 \text{ m (短里)}$$

であったことを算出します。

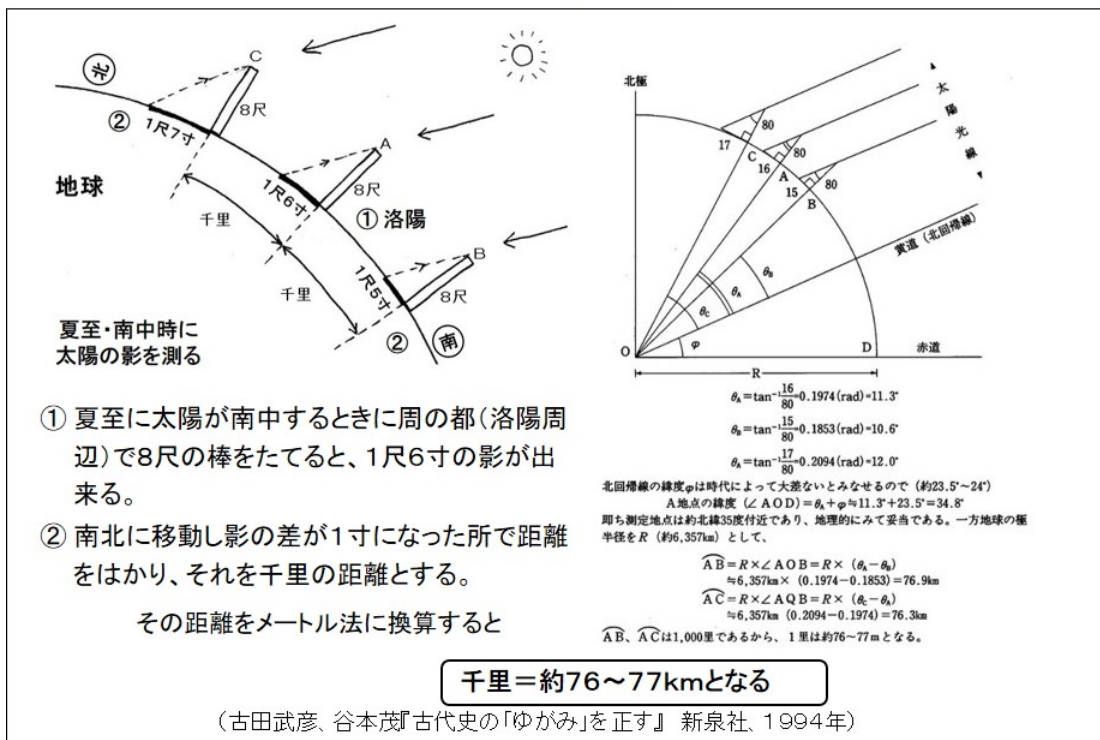
(詳細は『「邪馬台国」はなかった』参照)

<短里の証明：『周髀算経』>

古代中国において「短里」が使われていたことは、「一寸千里法」という中国最古（周代）の天文測量法を記した『周髀算経』の記述により証明されました（谷本茂。注⑤）。古田説の正しさが裏付けられたのです。



<一寸千里の法>



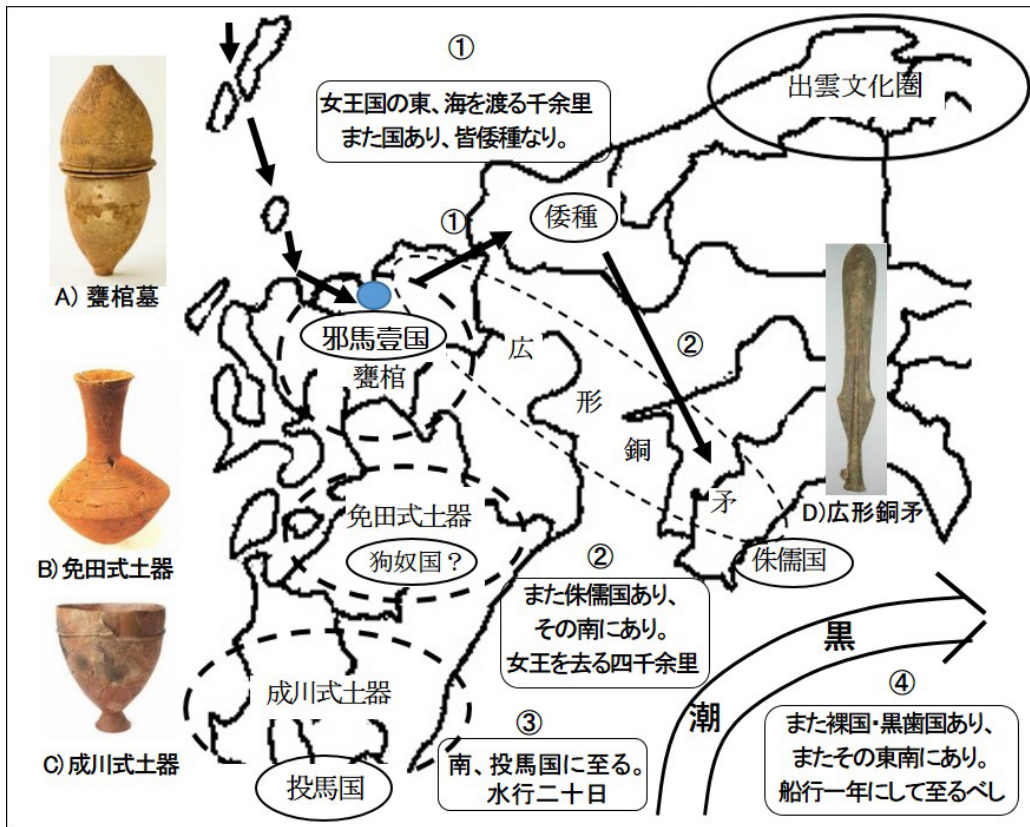
(四) 弥生時代九州の土器分布と「女王国」以遠の国々

帯方郡を出発して東松浦半島に上陸した魏使は博多湾岸にあった「女王国」に到着します。当時の筑紫平野では埋葬に大量の大型「甕棺」が使われていました。その中には「中国鏡・絹」「剣・勾玉」、さらには装飾品に加工された「南島の貝製品」など豪華な品物が埋納されていました。「倭人伝」には、「女王国」以遠の倭人の国が記されています。これらの国々では、どのようなものが使われていたのでしょうか、それぞれの地域の特徴ある出土物を見ていきたいと思います。

<倭人伝の記述>

- ① 女王国の東、海を渡る千余里また国あり、皆倭種なり
- ② また侏儒国あり、その南にあり。女王を去る四千余里
- ③ 南、投馬国に至る。水行二十日
- ④ また裸国・黒齒国あり、またその東南にあり。船行一年にして至るべし

<女王国以遠の国々と考古出土物>



<弥生時代・九州の土器>

- A) 甕棺墓：弥生時代中頃から、筑紫平野を中心に博多湾岸から有明海にかけて大量に使われていました。北は釜山地域からも出土しています。甕棺墓は弥生時代の「倭国」を象徴する墓制だったと考えられます（注⑥）。
- B) 免田式土器： 弥生時代後期、筑紫平野の南側では、中九州地域特有の形をした「免田式土器」が熊本市域を中心に分布していました。この地域では鉄製品が大量に出土し、

鍛冶工房も見つかっています。当時は他地域に先駆けて鉄器化が進行していたと見られることから（注⑦）、ここが長年「邪馬壹国」と戦いを続けた“その南にある狗奴国”の比定地と考えられます（注⑧）。

C) 成川式土器：弥生時代後半の南九州には大隅半島に「山ノ口式」、薩摩半島に「黒髪式」系の土器が分布していましたが、弥生時代末にこれらがまとまり、「成川式土器」に統一されました。この土器は古墳時代にも作り続けられ“ハヤトの土器”と呼ばれています。また同系統の土器が南西諸島でも作られていることから（注⑨），“南、水行二十日”にある「投馬国」はこの地域一帯にあったと考えられます。

D) 広形銅矛：当時、銅矛祭祀の中心は北部九州にありました。そして北部九州で作られた「広形銅矛」が高知県南西部から出土しています（注⑩）。

縄文時代、足摺岬周辺の広大な領域には数多くの巨石群が作られていました。これらは山頂の平面上に配置され、その中には鏡の役割をもたせるためか、一面が平面をなし太陽や月の反射によって輝き、中には灯台の役割を果たすためか南や東南の方向にある黒潮に向かって置かれていました。足摺岬の足下には黒潮が流れています。

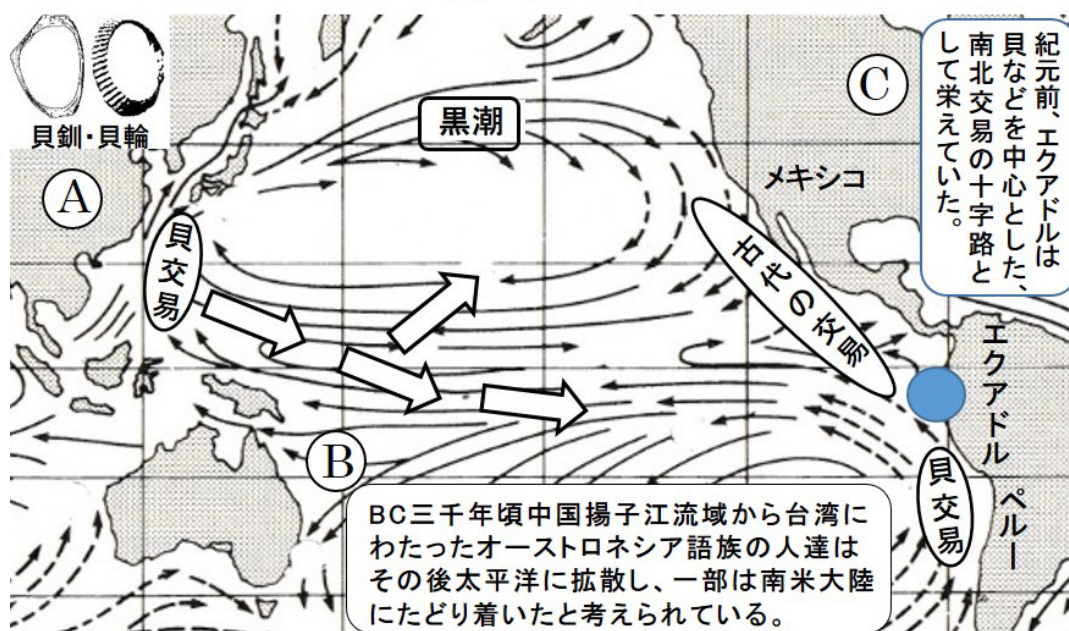
“女王国を去る四千里”の「侏儒国」は高知県の西南部、足摺岬周辺にあったと考えられます（注⑪）。

「倭人伝」には続いて“また裸国・黒齒国あり、またその東南にあり、船行一年にして至るべし”と記されています。

（五）アンデスの岸に至る大潮流

足摺岬沖に流れる黒潮に乗ればアメリカ大陸まで到達することは出来るのでしょうか。この時代、太平洋沿岸に住む人達は優れた航海術をもち、海流を利用して活発に太平洋を移動していました。

<太平洋の活動（紀元前後）>

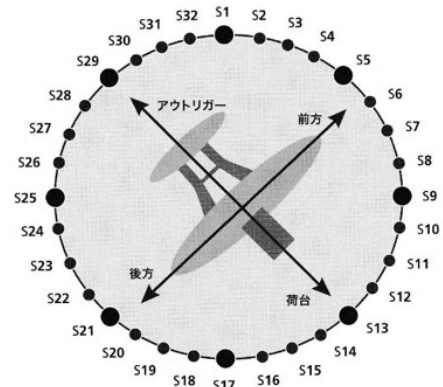


A) 倭人の南海との交流

弥生時代北九州から出土する甕棺には沢山の貝釧・貝輪が埋納されていました。これら貝製品の原材料は種子島・沖縄など南海の島々で採取されていました。南島産の貝は前述の成川式土器圏を經由して北九州に運ばれたのでしょうか。また鹿児島県西海岸にある金峰町では、加工途中の南島産の貝が出土しています。さらにこの地方では合口甕棺が使われていたことから、「倭国」中枢部との結びつきが強かったことが考えられます（注⑫）。

B) オーストロネシア語族の太平洋進出

沖縄の南では紀元前後から中国の江南地方にいたオーストロネシア語族が太平洋に乗り出し各地に拡っていきます。その中でポリネシア人はハワイからイースター島に進出し南米大陸にも到達したと考えられています（注⑬）。彼らは航海術にたけ、ダブルカヌーを操り太平洋を縦横無尽に動き回っていました（図A）。



星座コンパスとカヌー(図A)

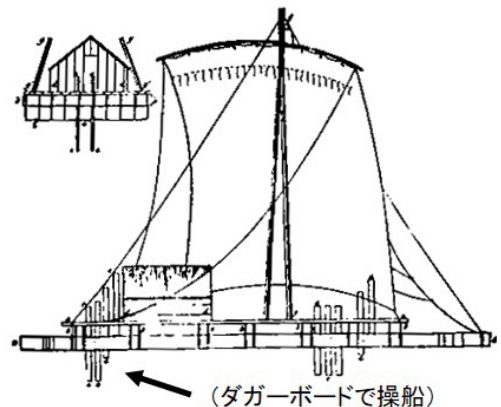
C) 米大陸西海岸の交易ルート

太平洋の向こう側、メキシコの太平洋沿岸部では、紀元前千年頃のエクアドル人の長期滞在の痕跡を示す遺跡が見つっています。古代の交易の痕跡です。エクアドル沿岸では雨乞いの祈りに使われるスポンディウス貝が生息し、装飾品である真珠が取れていました。当時のエクアドルの人々は入れ墨をして海に潜りこれらを採取し、北はメキシコ、南はペルーまで広域に供給していたのです。雨量の少ない太平洋沿岸部の人々にとって雨を降らせてくれるエクアドルの貝は貴重品でした（注⑭）。「倭人伝」に“倭の水人、黥面文身し蛟竜の害を避け、好んで水没して魚蛤を捕え”と、当時の「倭人」とエクアドルの人々は同じような手法で漁労をしていたことが記されています。

また太平洋西岸部の南北間の航海にはエクアドルで産出するバルサ材を使った筏が使われていました。図Bが紀元前後の航海に使われていた筏の図です（注⑮）。

この筏の特徴は舵の代わりに数枚の板を舟底に下ろし、これを上下することにより船の方向を変えます。2007年に古田氏一行が現地を訪問したとき、ちょうどエクアドル海洋歴史研究所が中心となり“古代舟復元プロジェクト”が立ち上げられ、エクアドル海軍や在留邦人の協力で建造されたバルサ船が出来上がったばかりでした。実験船の船長は日暮邦行

バルサ材の筏(図B)



氏で、実験の最初の目的はメキシコまでの航海を実現させることで、将来は日本までの航海を目指していました（注⑩）。その後、実験船は座礁し資金面の問題もあり残念ながらこのプロジェクトは中止となりました。

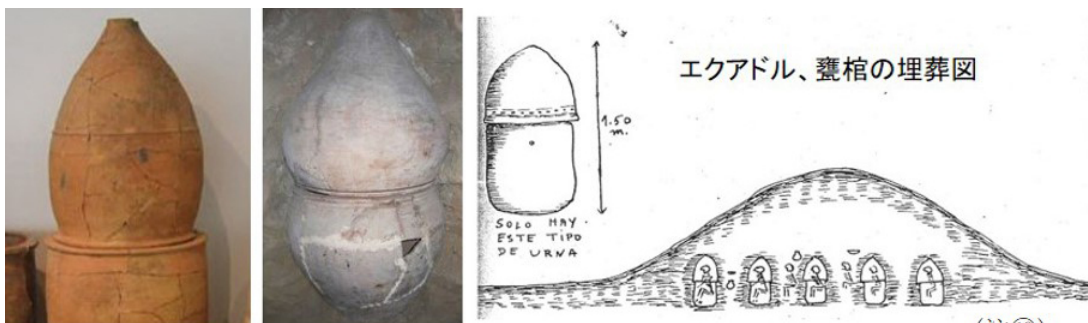
卑弥呼の君臨していた、博多湾岸を中心とする海洋王国は、太平洋上の多くの海洋の民の生活領域の一端の位置に存在していたにすぎないのである。
 （古田武彦『「邪馬台国」はなかった』、ミネルヴァ書房 2010 年、326 頁）

（六）古代のエクアドル文明

南米といえば、まずメキシコに栄えたマヤ文明、そしてスペイン帝国の侵略で滅びたインカ帝国を思い浮かべます。しかしこれらは紀元後に栄えたもので、南米最古の文明は紀元前約四千年前にエクアドルのバルディビアに起こりました。縄文文様土器の出土しているところですよ。

古代のエクアドルは海洋ルートでメキシコとペルー・チリ、そして陸路でもアンデスを越えアマゾンとも結ばれ、交易の十字路として栄えました。紀元前5～紀元後5世紀にはエクアドルの北、コロンビアとの国境にあるトリタという地で黄金文化が栄えていました。トリタのシャーマンはココアと灰を口に含んで歯を黒く染め、一種のトランス状態になり呪術を行っていました。遺跡からは黒曜石を磨いた鏡が出土しています。太陽を信仰していたのでしょ。

ここでは埋葬に北部九州と同じように大量の甕棺が使われていました（注⑰）。彼らは



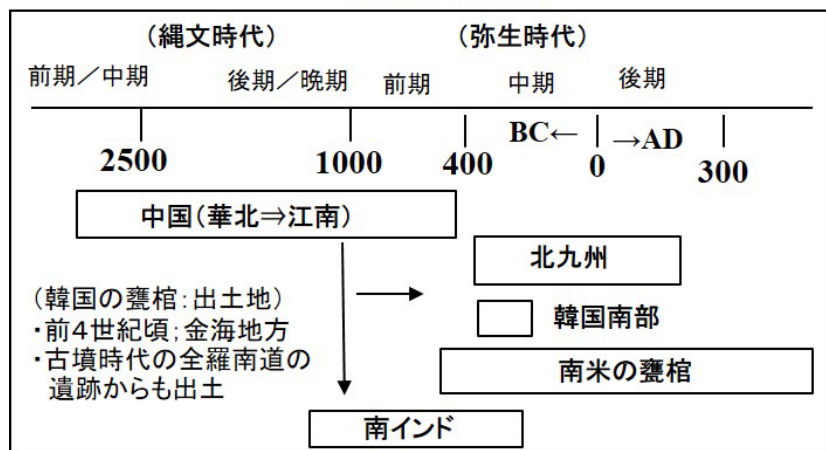
吉野ヶ里の甕棺 トリタ出土の甕棺

太陽信仰をもち、そして「倭人」と同じように航海術に長けていたのです。

<世界の甕棺>

北九州やエクアドルで大型甕棺が埋葬に使われていた時代、朝鮮半島南部、中国揚子江下流、インド南部の遺跡からも甕棺が出土

<甕棺の出土地>



しています（注⑱）。

中国華北で作られ始めた甕棺はその後長江流域に移り、紀元前千年頃にはインドのタミル地方でも使われるようになります。

言語学者の大野晋氏は、タミル語と弥生語の言語学の面から研究を進め、二つの地域の風俗・習慣また鉄生産、墓制、穀物生産、織機、祭祀なども調査しタミル語と弥生語は同系統の言語であることを結論付けられました（注⑲）。

紀元前十世紀頃に江南で稲作を行っていた人々は各地に移動を始めます。この頃地球に寒冷化が起こり東アジアにおいても大規模な民族移動の嵐が吹き荒れた時代です（注⑳）。日本列島や韓国南部にも稲作は広がり甕棺がもたらされました。エクアドルでも紀元前五世紀におこったトリタ文化は甕棺を使っています。エクアドルで甕棺はその後全土に広がり使われるようになりました。

（七）エクアドルの縄文文様土器、最新の情報

1965年、スミソニアン博物館のメガーズ博士夫妻、エクアドルのエストラダ氏により、“バルディビア出土の土器は日本の縄文土器が伝わった”とする「太平洋伝播説」が発表されました（注㉑）。エクアドルで出土した土器は、同じ頃九州有明海沿岸で作られていた曾畑・阿高式土器の文様と似ていること、また製作技法が類似していることなどが根拠とされました。



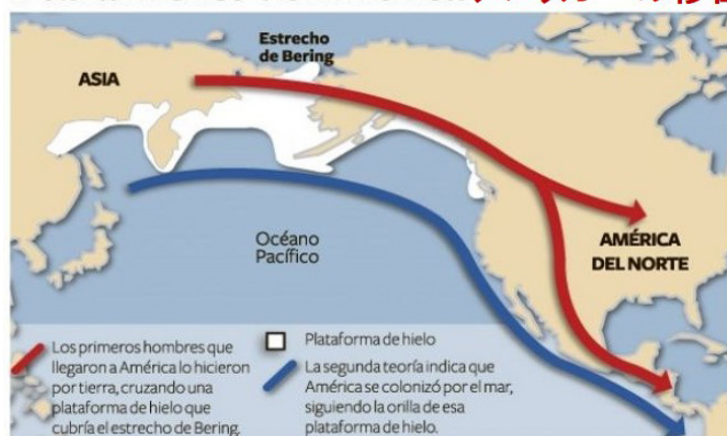
曾畑式土器

ところが日米の縄文学会はこの説に強硬に反対し、古代史学会では長い間「太平洋伝播説」は忘れられていました。そしてようやく2014年にエクアドル、ロシア、日本の合同調査団により50年ぶりに本格的発掘が始まり、バルディビアの縄文文様土器が再び注目を浴びるようになりました。日本からは東北大学の鹿又准教授が参加しています。

ロシア調査団はその目的を“シベリアで発生した土器がその後、モンゴル、中国、日本へ伝わり、それが太平洋を越えてアメリカ大陸へ伝わったことの解明”と説明しています。彼らは日本から南米大陸へのルートとしては太平洋沿岸部をたどる説を採用しています。

その後エクアドルでの大地震の発生などが起きましたが調査は進み、新しい研究成果が発表されています。ただエクアドル

Poblamiento de América **アメリカへの移住**



（出典:スポーツニク国際放送）

出土の土器と日本の縄文土器の関係については、解明にまだまだ時間がかかるようです。

<世界の甕棺の調査>

“縄文土器の太平洋伝播説”についての調査は始まりましたが、弥生時代の太平洋の交流を示す甕棺の発掘調査はまったく手が付けられていません。「甕棺」の調査は中国の長江流域から雲南地方、そして東南アジアからインドまで、また南米大陸と広大な範囲をカバーしなければなりません。ただこれは我々の先祖の想像を絶した広範囲な活動が解明される貴重な研究になります。一日も早く弥生時代の研究者の目が太平洋の向こう側へも向けられることを期待しています。

おわりに

1970年代に古田氏が「裸国・黒齒国」の南米説を唱えたとき、ほとんどの人がトンデモ説のように思いこの説を信じませんでした。しかしその後、時代が進むと考古出土品だけでなく、DNA解析、ウイルス学、寄生虫の研究など科学技術の進歩で古田説の正しさを証明する事実が次々と明らかになってきました（注②）。

なぜ“古田説は正しかった”のか、これは古田氏が正しい学問の方法で着実に研究を進めていったことにあると思います。

古田氏はその学問を“多元史観とその方法論に基づく新しい歴史学”とし、具体的に

イ. 多元史観とは

- ・古代日本には、関西を中心とする”近畿天皇家”だけでなく、九州王朝、出雲王朝、東北王朝、関東王朝などが各地にあった。中国史書に描かれている「倭国」は北部九州を中心とする“九州王朝”である。
- ・“九州王朝”は663年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れ急速に勢力を失い、701年に”近畿天皇家”に併合され、近畿天皇家は日本国を名乗った。

ロ. 古田史学の方法論

- ・第一次史料(出来る限り同時代に近い原典や金石文)を重視し、その徹底的な史料批判を行なう。また当時の人々の立場に立ってその時代を考え、さらに考古学的事実の裏づけをとっていく、論理的な方法論。

(「古田史学の会」入会案内、2009年。古田武彦監修)

と述べ、さらには“すべての用例(文献、考古学的出土物、その他)をひとつひとつ逐一再検証する労を惜しまないこと”とされています(古田武彦「忘れられた真実」(古田史学会報100号、2010年10月)。

古田氏の学問の方法は何も特別なものでなく、日本の中・近世史そして世界の歴史学者が採用している“当たり前的手法”です。

私たちが古田氏の研究方法に基づき、多くの人がベクトルを合わせ共に研究を進め、日本の隠された古代史の解明に取り組んでいきたいと思っています。

以上

<注記>

注①：古田武彦『俾弥呼』ミネルヴァ書房、2011年、第6・7章。

注②：中小路駿逸「答えが先か根拠が先か」『季節12号』エスエル出版会、1988年
『九州王権都と大和王権』海鳥社、2017年再掲

注③：古田武彦「古田史学会報」118号、2013年10月

“『「邪馬台国」はなかった』の根幹”は“「全用例調査」でなく、「論理性」であるとの見解に対して、古田氏はこの論考において厳しく否定されている。

「邪馬壹国」。これは三国志の魏志倭人伝中の中心の一語だ。この『「壹」と『臺』の峻別」こそ、わたしの立論の基礎をなしている。そのために三国志の中の「壹」と「臺」を調べ、この二字の“まぎれ”なきことを確認した。それがわたしの論文（「邪馬壹国」、史学雑誌七八 - 九）と『「邪馬台国」はなかった』執筆の原点となった。もし『壹』と『臺』の「混用」が見出されたとすれば、「邪馬壹国」の論文も、『「邪馬台国」はなかった』の著作も、わたしが「書く」ことはなかったであろう。
(古田稿要約)

注④：古田武彦『ここに古代王朝ありき』朝日新聞社、1979年

「古代史コレクション5」ミネルヴァ書房、2010年再版

注⑤：古田武彦、谷本茂『古代史の「ゆがみ」を正す』、新泉社、1994年。

「一寸千里の法」左側の図は、大下隆司、山浦純『「日出処天子」は誰か』64頁、ミネルヴァ書房、2018年より

注⑥：橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣、2005年

注⑦：村上恭通「2・3世紀の南九州における鉄の普及」『邪馬台国時代の南九州と近畿』ふたかみ史遊会、2011年)

注⑧：狗奴国の所在地：古田氏は『「邪馬台国」はなかった』において、狗奴国を熊本地方としたが、後に『後漢書』に基づき畿内の茨木・高槻市周辺と変わっています。

注⑨：橋本達也『成川式土器ってなんだ』鹿児島大学博物館、2015年

注⑩：岡本「銅矛の埋納遺跡」高知県立歴史民俗資料館だより第64号、2008年

注⑪：古田武彦「縄文ストーンの公理」『新・古代学第二集』新泉社、1996年

注⑫：原口泉他『鹿児島県の歴史』山川出版社、1999年

- ・大隅半島出土の「山ノ口式土器」は北部九州の須玖式の影響を受けている（22頁）。
- ・高橋貝塚から貝半製品、下小路遺跡から合口甕棺が出土（25頁）。

注⑬：印東道子、飯田卓編『オセアニア海の人類大移動』国立民族学博物館、2007年

注⑭：大下隆司「裸国・黒齒国の頃の南米」『なかった五号』ミネルヴァ書房、2008年

注⑮：J. Marcos 「El Tráfico y el Comercio a Distancia y el Surgimiento de las Sociedad Complejas」

注⑯：日暮邦行ホームページ「Fundacion Balsa Ecuatoriana -JP」（日文あり）

注⑰：E. Estrada 「Ensayo Preliminar Sobre Arqueologia Del Milagro」1954年

注⑱：大下隆司「エクアドルの大型甕棺」『古代に真実を求めて』11集、2008年

注⑱：大野晋『弥生文明と南インド』岩波書店、2004年

注⑳：安田喜憲『稲作漁労文明』雄山閣、2009年

注㉑：エヴァンズ、メガーズ、エストラダ「エクアドル沿岸部の早期形成時代」スミソニアン博物館、1965年

注㉒：

a) DNA解析：篠田謙一『日本人になった祖先たち』NHKブックス、2007年

b) DNA解析、ウイルス学：B. Meggers「VALDIVIA Y EL ORIGEN DE LA CERAMICA AMERICANA」
『LIBRO DE AMIGOS』エクアドルカトリック大学、2004年

c) ウィルス学、寄生虫：古田武彦『海の古代史』原書房、1996年。67-69, 180頁。